

小さな学校の大きな挑戦

～総合学習「プロジェクト米X^{コメックス}」そして「米^{コメ}ースをねらえ!」を通して～

美唄市立西美唄小学校

教諭 越山真史

はじめに

北海道石狩平野は我が国有数の米どころである。そのほぼ中央に位置する美唄市は、農業を産業の基幹とし、特に2003年度の米の生産量は、北海道内市町村の中で第3位、全国第11位を誇る。市立西美唄小学校は、市街地より西方10kmの西美唄地区に35年前に4校統合によって設立された全校児童数50名の僻地小規模校であり、四方を水田に囲まれている。本校の保護者の多くが稲作農業を営み、2002年度より総合的な学習の時間において、「米をもとにした課題解決学習」に取り組んできた。

『プロジェクト米X(コメックス) ～日本のお米を救え!』

2003年度の1学期、5年生であった9名は社会科の学習で、食生活の変化により、日本の米の消費量が年々減少していることを知った。「自分達に何かできることはないか!」。学級で真剣な議論が続いた。そして「私達の方で日本のお米の消費拡大を目指そう」という強い思いのもと、総合学習『プロジェクト米X』が立ち上げられた。市役所農政課や農業試験場など様々な施設を訪ね、多くの知識と体験を積んだ結果、小麦粉の代替として米粉を使う「米粉活用新製品開発」に着手。子どもたちは、地域を愛する気持ちとこだわりを持って意欲的に活動に取り組んだ。そして、最大限の努力と工夫のもと、「地産地消」「安心安全」がテーマの、米粉の特色を十分生かした2製品をみごとに完成させた。

『米(コメ)ースをねらえ! ～身近なお米から世界を見つめよう』

1.「なぜ輸入しているのか?」

2003年度の「プロジェクト米X」の学習中、「日本は、お米が余っているにもかかわらず、なぜ輸入しているのだろうか?」という疑問が子ども達に湧いた。その疑問を解決するため、昨年4月、学校に「農林水産省北海道農政事務所」の方をお招きした。そして「ミニマムアクセス米」の存在と、「今年は国際コメ年」だということを学び、『米ースをねらえ!～身近なお米から世界を見つめよう』をテーマとした、お米にスポットを当てた2年目の総合学習が始まったのである。

2.「国際コメ年とは?インディカ品種の栽培に挑戦!」

国際コメ年とは、いったい何なのか?子どもたちは主体的に学ぶ中で、「米の世界的役割や食料自給率の事、世界の飢餓を解決する方法を考える絶好の機会」だと気づく。そこで、世界で生産されているお米の約9割をしめる「インディカ品種の稲の栽培」に挑戦することとなった。暖かい開発途上国で多く作られている稲のため、温度管理がとても重要で、JA

美唄や北海道農業研究センターのご指導のもと、土日や夏休みも休まず、毎日、ハウスの中で世話をし続けた。



収穫したインディカ品種のお米とともに

3.「世界のお米食べ比べ～生産国調べ」

そのインディカ品種の稲を育てている間、子ども達は家庭科で世界の9種類のお米を食べ比べした。細長くてパサパサしているインディカ品種は、タイ、ベトナム、カンボジア、バングラデシュ産の4種類。日本で多く食べられている粘り気が多いジャバニカ品種は、中国や台湾、そしてアメリカ産のあきたこまちやオーストラリア産のこしひかり。また、インディカ品種とジャバニカ品種の中間的なジャバニカ品種は、イタリア産。それぞれの特色をインターネット等で調査活動を行った結果、自分達が育てているインディカ品種の稲は、東南アジアの開発途上国で主に生産されていることを知る。「開発途上国って、どんな国なんだろう?」。子ども達は、食べ比べした9種類の稲を生産している国々の人口や面積、天候、文化、言葉、衣食住などの特色を調査し、新聞にまとめ、発表した。



世界のお米を食べ比べ

4.「世界がもし100人の村だったら」

徐々に世界に興味関心を持ち出した9名の子ども達。7月には、「世界がもし100人の村だったら」という参加型ワークショップの学習に取り組んだ。その中には、50年後の世界の人口やその問題点、貧富の差が国々でとても激しいことなどを学ぶ。また、早稲田大学平山郁夫ボランティアセンターの国際協力活動家をお招きして、



世界がもし100人の村だったら